01 宮城県仙台市
仙台市サイン整備

はじめて訪れた人も歩いてみたくなる。
そんな街づくりのために、
屋外サインという視点から
仙台を見つめ直しました。

伊達政宗公が仙台藩を開いた江戸時代、一帯は「宮城野」と呼ばれており、平野には風雪を防ぐ木がほとんどなかったそうです。その後、政宗公は城下町を築くために積極的に屋敷林をつくり、美しい並木（＝杜）の町が育ちました。現在、仙台が「杜の都」と呼ばれる理由はここにあります。

さて、その仙台市が大規模なサイン整備を行いました。2015年3月に『国連防災世界会議※』（以下：防災会議）が開催され、12月には市民待望の足『仙台市地下鉄東西線』が開通するなど、ビッグイベントが続いた年となりました。市は当初、12月の地下鉄東西線開業を目標にサイン整備計画を進めていましたが、それよりも9ヵ月も早い3月に防災会議の開催が決定したことで前倒しされたスケジュールを実現させるために、様々な工夫を凝らしながらサイン整備を行いました。

今回は、そんな仙台市のサイン整備プロジェクトを進めた都市景観課と道路計画課の計4名の方にお集まりいただき、どのようにプロジェクトが行われたかをお話いただきました。

INTERVIEW
都市景観課と道路計画課、仙台市と各交通機関。互いに手を取り合ったから、実現できたこと。

都市景観課は、仙台市の街全体を美しく保つために、景観に関わる建物や広告物・サインなどの管理・助言を行っています。今回のプロジェクトにおいては、サインの設置・制作の基準となるガイドラインの策定を行いました。道路計画課では、仙台市が抱えている道路事業全体の調整を行っており、今回のサイン整備では、ガイドラインで定められた規定に沿ってサイン計画・設置位置の選定などを行い、各区との調整の役割を担いました。

仙台市には従来のガイドラインが存在しましたが、その内容は2001年の宮城国体、2002年の日韓ワールドカップ開催に合わせて策定されたものです。当時から約15年が経過し、時代背景や街の変化などからいくつかの課題が見えてきました。そこで防災会議の開催や地下鉄東西線の開業に合わせて、2014年に新ガイドライン『歩行者系案内誘導サイン等基本方針』が策定されました。

INTERVIEW

仙台市 都市整備局 計画部
都市景観課 景観係 係長
齋藤 理之 氏

仙台市 都市整備局 計画部
都市景観課 景観係 主査
佐々木 正春 氏

仙台市 建設局 道路部
道路計画課 事業調整係 係長
我妻 晋一 氏

仙台市 建設局 道路部
道路計画課 事業調整係 技師
及川 智宏 氏

今回のプロジェクトにあたっての課題

課題01 ＜情報の連続性＞への対応
現在地から目的地まで向かう際、歩行ルートを想定し、必要とされる情報を整理する。

課題02 ＜情報の伝達性＞への対応
サインの視認性を高め、分かりやすい地図となるよう、デザイン等を改善する。

課題03 ＜景観＞への対応
サインの乱立を避け、デザインを一貫させることで統一的で分かりやすい整備をする。

上記の課題を解決するために注力したのが、各交通機関との協力でした。JR東日本、宮城県バス協会等、各交通機関のみなさまと協議を重ねることで、なるべくデザインを統一することを心がけました。各社にデザインや設置基準がある中で、柔軟に互いが歩み寄ることができたのは、今後、様々なプロジェクトを行う上でも大きな収穫となりました。

※国連防災世界会議
国際的な防災戦略を議論する国連主催の会議で、これまではすべて日本で開催されています（第1回：1994年横浜、第2回：2005年神戸、第3回：2015年仙台）。第3回国連防災世界会議では、新しい国際的防災指針である「仙台防災枠組2015-2030」と、防災に対する各国の政治的コミットメントを示した「仙台宣言」が採択。期間中は約15万人が仙台市を訪れました。

©2016 KOTOBUKI Co.,Ltd.

仙台市サイン整備

“仙台らしい”サインとは何か。誰もが利用しやすいサインとはどうあるべきか。

市内一帯のサインイメージの統一は、今回のプロジェクトの大きなテーマでした。なかでも色が果たす役割は大きく、キーカラーは杜の都をイメージさせる深緑色に。従来から使用されていた色ではありましたが、新たに設置したサインにも引き続き使用し、一層の統一感を出すことができました。また、仙台駅から仙台城跡へ至る青葉通りとその周辺には、伊達家の旗と陣羽織をイメージした茄子紺色を採用。観光施設としてのアクセントを持たせることにしました。

さらにはバリアフリー化も重要なポイントでした。たとえば以前は、サイン脇にスツールが設置されている箇所もありましたが、車椅子の方の見やすさを優先し、それらは撤去しました。地図の設置高も、車椅子からでも見えやすいように変更。そして防災会議には多くの外国人の方が訪れるため、サイン表記は4ヵ国語（日/英/中/韓）に統一し、言語バリアフリーを実現しました。

定禅寺通周辺

けやき並木が美しく、「秋のジャズフェスティバル」や
「SENDAI光のページェント」の会場として利用される定禅寺通のサイン整備。

改修前

仙台城跡周辺のサインには茄子紺色を使用

宮城野通周辺

仙台駅東口から東北楽天ゴールデンイーグルスの
ホームスタジアムがある宮城野原運動公園へ延びる宮城野通のサイン整備。

改修前

サインの場所一つを決めるにも、図面上で決定せず、自身で現地に立って確かめる必要がある。

今回のプロジェクトにおいて、もっとも注力したのが、サインの設置場所の選定です。パブリックスペースをどう有効的に使うのか。たとえば歩道を狭めないように、そして車を運転する方の死角をつくらないように、現地に行って自らの目で確かめながら、一つひとつ検討する必要がありました。そのときに欠かせなかったのが、街をより詳しく知っている各区との連携です。実地調査や議論を重ね、ときにアドバイスをもらいながら、設置にふさわしい場所を絞り込みました。ただ、現実には設置をしたくても地下に埋設物があることもあり、適切な場所を探すのに根気のいる作業が続きました。

現在は、ほとんどの人がスマートフォンなどの端末を持っています。地図を見たいと思えば見られる環境があるのですが、実際は手間のかかる作業です。はじめて訪れる街でスムーズに目的地まで辿り着けたという体験は、街としてのイメージアップにつながります。そういった意味では、見たいときに、見たい場所にサインがあること。そして直感的に分かりやすいことを心がけ、“おもてなし”の役割を果たし、仙台市の魅力を発信できるサインづくりを目指しました。

©2016 KOTOBUKI Co.,Ltd.

仙台市地下鉄東西線 開通

荒井駅前

ガイドラインに沿いながらも、要所では臨機応変に利用者の使いやすさを優先させる。

地下鉄東西線の開業にあたっては、まず沿線全体の大きな地図をつくり、その後各駅の地図を切り出して、周辺地図をつくるという方法で制作を行いました。その際、地域を熟知している区役所をはじめ、様々な部局と協力しながら内容を精査し、完成させたため、通常よりも時間のかかる作業となりました。また、地図に掲載する施設は、基本的にはガイドラインに沿って決定されるのですが、駅ごとに臨機応変に対応した例もあります。たとえば青葉山駅の場合、駅周辺の主な施設としては東北大学や宮城教育大学のキャンパスでしたが、ガイドラインに従うと大学名だけの表記となってしまいます。駅利用者の多くは大学を訪れることから、地図にはキャンパス内の詳細を表記したほか、主要な大学施設は4ヵ国語で案内するなど、柔軟に対応することで、"学都仙台"をアピールする地図としました。また別の駅では、ガイドラインで定められた縮尺で表記した場合、駅周辺の主要施設が地図内におさまらなかったため、その駅は他駅と縮尺を変えるなど、こちらも利用者目線を優先させました。

荒井駅前

八木山動物公園駅前

国際センター駅前

薬師堂駅前

設置はスタート。観光客や市民のみなさまに、どう利用されるかを見ていく必要があります。

サインは設置して終わりではありません。東西線開業により、街が変化していくものと思われます。これからは、サインの更新やメンテナンスにかかる手間にどう対応していくかです。観光客や市民のみなさまが必要とする情報は足りているか、地域の賑わいに貢献できるようにするためにはどのようなサインがどこに必要かを考え続けていかなければなりません。そのため、利用者の方から頂くご意見はなくてはならないものです。今後もサインを整備する関係部局と協力しながら、観光客や市民のみなさまが過ごしやすい街をつくっていきたいです。

©2016 KOTOBUKI Co.,Ltd.